

# 宮澤賢治の幻視力

## 「出入幽顕」の事例考察として

丸山敏秋（倫理研究所理事長）

「これからの宗教は芸術です。これからの芸術は宗教です」（宮澤賢治）

「明朗の人生を生む高い道は、芸術であり、完全にして根本的な最後のものは、宗教である」（丸山敏雄）

### はじめに

宮澤賢治ほど多彩な光を放っている作家は日本にいない。世界でも希有であろう。

賢治は喩えれば、八ヶ岳のような山に似ている。どの地点に立って眺めるかで山容が多様に変化するように、賢治も得体の知れない多様な顔の持ち主である。ゆえに文学のみならず様々なジャンルに身を置く人々が賢治を論じ、書かれた書籍は汗牛充棟と形容するにふさわしい。

賢治の生誕百年に当たる1996年には、なんと146冊もの新刊書が刊行され、各種のイベントが開催された。大学の日本文学専攻の卒業論文で、いちばん多くテーマにされるのも、近年では宮澤賢治だという。賢治の作品を愛好する人たちは、今後も当分は減ることがないと思われる。賢治の何が人々を魅了するのだろうか。

一人の賢治愛好者としてこの問いに向き合うとき、宮澤賢治という作家の持つ特異な能力に行き着く。それは、異界（異次元の世界）に参入してそこへ精神を置き留め、感知した情景をそのままスケッチできる能力である。そうした角度から賢治を捉えるのは、気球か軽飛行機に乗って八ヶ岳を上空から眺めることになぞらえられよう。地上からではけっして把捉できない視点に、見る者が移動しなければならないのだ。

筆者が宮澤賢治について書きたいと強く思ったきっかけは、2011年3月に発生した東日本大震災であった。震災後二十日ほどが過ぎて東北三県の被災地を訪ねたとき、岩手県では花巻市に投宿した。夕刻から深夜にかけて大きな余震が何度も起きるなかで、賢治の故郷に自分が居ることをしきりに思った。賢治の作品を熱中して読んだ時期が、それまでに少なくとも2度あり、20数年前には宮澤賢治記念館を訪れたこともある。蠱惑的ともいえる彼の存在が、脳髄のどこかに宿っていたからであろう。

その時は知らなかったのだが、賢治は明治29（1896）年の三陸大津波の年に生まれ、昭和8（1933）年に同じ三陸地方で大津波が発生した年に没した。前者は賢治が生まれる2ヶ月近く前に発生したマグニチュード7.6の地震で、大津波は岩手県内だけで1万8千余人もの命を奪ったという。賢治が生まれてからも大きな余震が幾度も起こった。大津波の発生と宮澤賢治の生没年をこじつけるつもりはないが、幼少期から聞かされたであろう怖ろしい津波のイメージは、若い頃に作られたおどろおどろしい彼の一連の短歌「青人のながれ」（後述）などに反映されているのかもしれない。

被災地から戻った後、筆者は駆り立てられるように賢治の作品を読み直し、数多くの賢治論を入手して読みつづけてきた。そうこうするうちに、これまで主要な研究テーマの一つとしてきた「幽顕論」から、賢治という不世出の作家を見つめてみたいと思うようになったのである。

\* 本稿において宮澤賢治の作品と書簡は『校本宮澤賢治全集』（筑摩書房、1974）を底本とする。